



模擬授業、漢文「両頭の蛇」での多層的な「読み」
— 故事成語・逸話における「文学を文学として《読む》」という「座標軸」 —

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 美智雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008847

模擬授業、漢文「両頭の蛇」での多層的な「読み」

― 故事成語・逸話における「文学を文学として読む」という座標軸 ―

荒木 美智雄

一、はじめに（高校国語教育での「漢文」の位置付け）

「漢文」とは何か。なぜ私たちは、高校の国語で学ぶのか。それは、日本民族にかつて「文字」がなく、中国の「漢字」を積極的に取り入れ、表記され、漢字・漢語が元になってやがて「かな」が考案され、現在の「日本語」を成立させた源泉からである。また、中国の偉大な古代思想・広範な「文化」を吸収し、日本人の「思想」・「情操」を豊かにしてきたからだからでもとも言える。

したがって、「漢文」は、本来外国語であるが、その訓読された「文字」はすでに現在「日本語」である。と同時に、漢文は日本民族の「古典」だけではなく、崇高な表意文字（象形性故たる「人類の古典」といつても言い過ぎではないと、私は考える。「日本語」を学ぶ基礎・基本は、古文の元である、「漢文」を抜きにしては、語れない、圧倒的な「史実」がここにある。

漢文学習の「意義」と「目的」について、漢文学者の田部井文雄が、以下のようにまとめているので参考にしたい（註一）。

（一）日本文化の源流・本質・意義を理解し、その発展・推進の高い指標を得るため

（二）現在の言語生活を豊かにするため

（三）古典の永遠性・世界性に学んで人間性を高めるため（教養・情操・視野）

これらの目的を達成するには、漢文の「読解・鑑賞の能力」を養うための漢語の基礎知識や訓読の「技術」を習得する指導が、必要不可欠である。この問題の詳細は、模擬授業の「両頭の蛇」（第六章）において行うこととする。その前に「言葉」について若干、私論を述べたい。

二、「言葉」とは何か、「内言説」とソーシャル「言語学説」

前述（註一）参照した著書『漢文教育の諸相』でも「日本語の現在と漢文教育」で、安藤信廣（註二）が、言葉とは、「情報伝達」だけの機能に限定せず、「認識」過程に及ぶという観点で、新たな視点を付加しつつ、以下の二点にまとめて論じている。

（一）言葉の伝達機能としての「情報」

（二）人間が知覚し、思考し、判断する「認識」過程の全体（＝内言 ヴィグツキー）

しかし、私はここでもう一点付加したい。それは、（三）ソーシャル言語学の「言葉とは、モノの名ではなく仕切るもの」ということである。

(1)の情報伝達は、最も顕著な言葉の働きを指して示し、理解しやすいが、(2)は、特にソビエトの心理学者ヴィゴツキーが提唱したもので、現在の「国語教育」においても根幹をなしている。文法指導などは、表面的な知識の注入だけでは不十分であり、内言Ⅱ思考活動を活性化し、充実させることが、文法教育上必要不可欠となっている。

そこにもう一点、付加すれば、前述した「言葉の仕切り」というソシール言語学の観点である。

ソシールは、言葉はものの名・カタログ言語観ではなく、「仕切り」によって差異化されたものに、名が与えられ、初めてその「モノ」が存在すると主張する(註3)。

簡単な例を出せば、日本語の「雨」、「夕立」「春雨」「秋雨」「氷雨」などである。海外で「今日降っているが、この雨は何といえますか」と日本人が質問したら、「お前は馬鹿か。雨は雨だ」という答えしか返ってこない。日本人だけが、四季折々の「雨」を「仕切る」ことで名を与え、春の草花が芽吹く時としと優しく降る雨を特別に「春雨」という言葉を日本人の文化的特質が、創作したのである。したがって、海外の人には、日本のような秋雨「氷雨」などの名が全く存在しない故に、それらの「雨」自体も存在し得ないことになる。話を漢文に戻し、この問題を考察してみよう。

漢文でよく出てくる「也」「矣」「焉」という助字(置字)がある。全て文末にくる「断定」の意を表す漢語である。三者とも安易に「断定」と解して漢文を口語訳すると、大きな間違いを犯す。中国人はこれらを音読し、かつ、漢語の意を「仕切」って(差異)によって内言化しているのであるから。

したがって日本人もまた、置字として「音読の回避」で、そのものの「意」自体を排除したら、大変なことになるであろう。この三者とも「漢和辞典」で(差異)を明確にして、取り扱うべきであろう。この違

いは以下のようになる(註4)。

「焉」…言い切る感じ。一番格好良く、弱い意気高揚で、余韻あり。

「矣」…キツと言い切る。主観的な語気を強調する。
「也」…すらりと言いとどめる。客観的な確認判定。

※漢字を「仕切り」で論じたが、伝統的な国語教育の読解では、「言葉の形象を豊かに読み取る」という意で、三者を区分する方法は、極めて重要である。

以上、ソシールの「言語学」に「こ」で言及したが、田中実の『小説の力』新しい作品論のために『(大修館)などを「中心に、新たな読解論が多くの国語教師に影響を与えている。彼の「読解論」もまた、ソシール「言語学」からきており、その関係性を充分学ぶ必要はあると、私は考える。

三、「故事成語」「逸話」の読解方法としての「三方法」論

今回の論考は、漢文「両頭の蛇」を取り扱うので、「故事成語」には、入らないため「故事成語」及び「逸話(寓話)」という範疇で、この論考を叙述することにする。

「故事成語」などは、入門教材として教科書で取り扱われることが、実に多い。そこで、「訓読の用い方」「書き下し文(の直し方)などの基本事項を教えることに重点が置かれる。そのため、一般的に「故事成語」の「寓話的な面白さ」がとりわけ重視される故に、その「寓話」がどのように喩えられ、どんな歴史的な背景で用いたのかという「故事成語」の背景が軽視されることを問題視する研究者は、多い。

私もその一人であるが、代表的な指摘者は、渡辺雅之氏である(註5)。「故事成語」の寓話的内容を興味本位に終始すれば、こんな話

(イソップ的童話等)は、故事成語の意味だけの理解で十分だと考えられたり、作品の「深さ」から来る、本当の面白さを回避される傾向を生む。また、アカデミズムという「学問体系」故の「深さ」から除外される最も大きな弊害は、「中国面白い昔話」などと揶揄される安易な「学び」(軽さ)の蔓延であろう。歴史の荒波を乗り越えて現在でも汎用性の高い「故事成語」は、寓話的面白さ、それ以上に、深い歴史的な文脈(歴史的背景)で捉えることが、以上に大切であると氏は強調するが、私も全く同感であり同意したい。

したがって、その学び方の方法は ①「入門期の古事成語」②「古事成語の背景」の二点が上げられるが、これにもう一点、私が考える③「古事成語そのものを、文学作品としてそのまま読むこと」を提示したい(註6)。第四章で詳しく見ていこう。

四、「古事成語の背景」と「文学作品としての寓話」の読解

渡辺雅之氏の提案する「故事成語の背景」を重視する授業は、「矛盾」が好例である(註7)。こんな説明を氏はしている。

盾と矛を最強だとして売り込んだ男が、客からその矛で盾を突いたらどうなるのかと聞かれ、答えに窮した「寓話」。これは、孔子批判が本意である「寓話」となっている。

堯の統治下で、舜(前帝)が境界線の紛糾を見事解決する等、三点の「善行」を評価し、孔子が感嘆しつつこの三つは舜の本職でないのに舜が出かけそれらを成したのは、弊風を救うためなのだ。舜は何と仁者ではないか」と評価した。一方「ある人」が儒者に「その時、堯は何をしていたのか」尋ねると、「堯は天子あったと答えた。(ある人)が「それなら孔子が堯を聖人だとしているのはどうしてか。堯が聖人なら世の中はうまく治まっているはず。民の弊風などあるはずがない。(略)舜を賢人として認めれば、堯の明察力を否定することになり、逆に堯を聖人と認めれば、舜の民への感化を否定することになる。両方を同時

にともに認めることはできないはずだ」と批判した。

この話の後、「矛盾」の寓話が用いられているのである。ここまで「深さ」を求めれば、重層的な漢文の読解が可能となるという「思考」に賛辞を送りたい。しかし、ここまでの凝縮した内容は、「入門期」では、ほとんど不可能であり、二・三年の履修内容であろう。

さて、この「時代背景」に対して私が提案するのは、「寓話」を喩えとしての単なる「語り」ではなく、そこに隠された別の視点の「文学的意味付け」を考えるという「読解」である。この「矛盾」であれば、商人がある人に「矛で盾を突けば、どうなる」という難題を受け、どう答えば、商人としての「語り」を維持できたかという「発問」の設定である。どんな時でも、「商売」を行う場合、客からの難題を突き付けられ、当惑するのは、「日常」である。それを克服するのも作品の中の「深さ」を探究する要素が、ここになる。

商人の誇りを維持する回答としては、AとB二つ考えた。A「天下無敵の矛と盾、両方が火花を散らし、相討ちとなって商売台無し。そんな馬鹿な問いに応えられないよ。商売の邪魔をしないでくれ(「商売人の本音論(売り方論)」と拒否するか、または、B「これは、お互いの完全無敵を表現する喩えであって、それにお対して、お客さん、面白い質問をするね。ぜひその智慧に免じてこの両方を買って自分で試しておくれ(「喩え論」など様々な回答が考えられるであろう。しかし、そのこと自体が、孔子批判(答えに窮すること)が主要テーマであるから、この「発問」商人の「誇り」や「喩え」という回答は、多少ずれるので、別の「寓話」で、もう少し私の説明を施したい。その寓話は、イソップ童話の「ウサギとカメ」という寓話である。この「寓話」に対して読解の「法論(文学作品を文学として読み解く)、それは私が提案した次の、「思考」の三要素。つまり、「広さ(多面的思考)」「深さ(因果関係の思考)」「高さ(俯瞰的な思考)」という論理的な「方法論」を駆使した考察である。その読解をしよう。

五寓話、「ウサギとカメ」を文学作品としての読解「案」

日本人は、この寓話「ウサギとカメ」の教訓としては、すぐに「ウサギのように油断するな。カメのように努力を怠るな」となるはずだ。一方、フランス人は全く正反対の結論を出す。それは、「カメを見習ってはイケナイ。何故なら、ライバルであるウサギを起こさずに、自分の勝利のために身勝手な行動をとったから」と続く。それが、重層的な思考という視点で多面的に思考すること。これは、比較的に容易なことであり、誰でも試みることであろう。

次に、「なぜ」という視点の「深さ」である。「ウサギはなぜカメに負けたのか」。また、ウサギが油断して寝ている時、「なぜカメはウサギを起こさなかったのか」という視点の考察でもある。

「なぜ」という「深さ」の視点は、その機能の限界性としては穴掘りの如く、「生き埋め」という狭隘さそのものを内在させる欠点を持つ。なぜなら、その問いは、同次元、かつ同視野でしか思考できないために、「問い」の質的变化ができず、解明不能ことが生じる場合が、実は多いからでもある。

その時、俯瞰的な思考としての異次元からの再考察を行う「高さ」が必要になる。ウサギとカメの話では、ライバル論を論破すれば、新たな視点が登場する。それが、両者はライバルではないという「帰結」である。競争相手というのは、同条件、同能力、同動物類という絶対条件が必要となる。

しかし、そもそも「ウサギ」と「カメ」が競争し、「カメ」が勝つということは考えられない。したがって、カメが勝つために「寝ているウサギの無視」ということは、この寓話の成立絶対条件であり、「ここに」この寓話自体の価値もある。その教訓（価値）は、「もの（勝負）ごとに

は、絶対はない」という「高さ」故の、この結論に辿り着く。

有名な例としては、ラグビーの日本の試合である。ワールドカップにて日本は、対南アフリカ・アイルランドに二大会連続の「奇跡」を起こした。これが、この寓話の教訓、すなわち、「勝負はやってみなければ、分らない」ということだ。こんな授業を「故事成語」や「逸話」で実践を行なったのが、今回の「両頭の蛇」の模擬授業である。

六、模擬授業「両頭の蛇」の読解

ここからの実践記録は、北海学園大学の教職過程「教育実習実践指導Ⅱ」で行った「模擬授業」の内容である。この「講義」を受け持った三年目、1部（昼）と2部（夜）の学生に「教育実習」の実践指導という形で「講義」を行なっている。今回は、「両頭の蛇」であるが、この教材には「新序」と「蒙求」の2種類あり、講義では、『新序』を取り扱った。この両作品を比較検討することも含めて、最初に「原文」の資料として「書き下し文」2種類を掲載する。

〔A〕孫叔敖嬰兒（えいじ）たりし時、出遊して両頭の蛇を見、殺して之を埋む。歸りて泣く。其の母其の故を問ふ。叔敖対へて曰はく、「聞く、『両頭の蛇を見た者は死す。』と。嚮者（さき）に吾之を見れば、母を去りて死するを恐るるなり。」と。其の母曰はく、「蛇今安くんにか在る。」と。曰はく、「他人の又見んことを恐れ、殺して之を埋む。」と。其の母曰く、「吾」聞く、『陰徳ある者は、天報ゆるに福を以てす。』と。汝死せざらん。」と。

長ずるに及びて楚の令尹（れいいん）と為る。未だ治めずして國人其の仁を信ぜり。『新序』

〔B〕孫叔敖嬰兒たりしとき、出遊して還り、憂へて食らはず。其の母其の故を問ふ。泣きて対へて曰はく、「今日吾両頭を

見たり。去死すること日無きを恐る。」と。

母曰はく、「今蛇安くにか在る。」と。曰く、「吾聞く、『兩頭の蛇を見る者は死す。』と。吾他人の又見んことを恐れ、已に之を埋む。」と。

母曰はく、「憂ふること無かれ。汝は死せず。吾之を聞く、『陰徳有る者は、天報ゆるに福を以てす。』と。人之を聞き、皆其の仁たるを論る。令尹たるに及び、未だ治めずして国人之を信ず。」

『蒙求』

『新序』は、前漢の劉向(りゅうききょう)による故事・説話を集めた書物であり、一説には劉向の著書ではなく、既存の書籍を彼が校訂しただけという説もある。『蒙求』は、成立は8世紀前半、著者である李瀚(りかん)以外、何も分かつていない。伝統的な中国初心者向けの教科書であり、日本でも平安時代以降広く使用された「読み物」である。

私たちが用いた教科書は『新序』版である。両者の差異は、特にないが、一点傍線部「死」に対して「母を去る」(『新序』という表現と「蛇を殺して埋む」(同)ということと単に「埋む」(『蒙求』)とした点である。これについて、後で論じたい。

学生には、「古典」でも「現代文」でも国語教育の二本柱は、「言語教育」と「音読指導」が土台であり、その上に「読解」という「読み取り」の言語活動の展開がなされると毎回、主張している。では、模擬授業に入る前に「言語教育」と「音読指導」という土台について若干触れたい。

(1) 言語教育、学校文法の課題と漢字学での「解字」問題

「言語教育」とは、文学作品や評論を読み解く場合の、基礎基本となる最重要事項である。「古典文法」は、平安時代から、鎌倉・室町、

そして江戸時代まで継承された国学者の比類稀な努力によって、学問的な体系が確立されており、教える場合、何の問題も生じていない。問題は、明治時代における「口語文法」、特に学校文法である。欧米の「英語文法」に基準を合わせ、その体系化を無理に押し進めた結果、様々な問題故に、多くの瑕疵を生じていると私は考える。

問題の根本は、「品詞分解」に重点が置かれ、付属語である助詞・助動詞を自立語との関わりに無関係かつ、孤立的に教える弊害(形態素主義という問題点)である。文末表現を自立語と付属語(述部)を含めて、モダリティー(文のきもち)を取り扱うべきだと私は、考えるのだが。どうだろうか。批判を乞いたい。

もう一点は、「漢字」の問題である。漢文でも、古文でも、漢語・漢字は、文章を理解する時、最も重要な「コトバ」である。その漢字の読み方、使い方だけでなく、成立の根元「解字」まで含めて、生徒に教える重要性を学生には、常々強調してきた。

今回の模擬授業でも、「こたふ」には、「応ふ」「答ふ」「対ふ」の3種類があり、さらに「曰はく」が使用される。これらの差異を明確にして教える必要がある。①「対ふ」は天子の下問にこたえる文(目上の人)にこたえること。②「答ふ」は「応対する意味」であり、③「応ふ」は呼応する意味で両者②③はほぼ同じであると考えられるが、最後の「応」は再読文字の「まさになべし」を呼び覚ます働きがあり、注意を要する。このところも含めて、模擬授業では展開していた。

では、「曰く」は、どうか。その意は三点、「①言う②言うには③のたまはく」の意であり(いわくの敬語と『辞典』にも掲載されている。この漢文では、③の意で漢文では使用される。解字では、「口から氣が出る」ことを表現した字)『新選漢和辞典』(小学館)となっていて、「日」太陽のように右中の横棒が、縦棒には接触せず、離れていること。一方、白川静は、「曰く」の字が「祝詞などの神霊に告げる書を取りめる器」サイの蓋を開けて見ようとする形」と解説し、「のたまう」の古義

に近いと補足している。参考まで叙述する。

本文『新序』『蒙求』(両者とも)では、孫叔敖が目上の母に言う場合、特に「対て曰く」と記述され、母は「曰く」という形で表現されるのは、「敬意表現だからである。しかし、これ以降は、この「敬意は略されているので、この一回だけの使用となっているので注意したい。では、次に「音読指導」に触れたい。

(2) 音読指導についての「訓読文」を読む重要性

古文の場合、「歴史的仮名遣い」に注意しながら、音読するのだが、漢文の場合、「書き下し文」に直した後で、音読するのか、直す前に音読させても良いのか、と学生から質問が来る。私は、教科書記載の「訓読文」を直接音読させる方法をとっている。漢文のA―Dの文章で考察する。

- | | | |
|---|--------------|-----|
| A | 我読書(白文) | 中国語 |
| B | 我読ムレ 書ヲ(訓読文) | ☆ |
| C | 我書を読む(書き下し文) | 日本語 |
| D | 私は本を読む(口語訳) | |

本来、Cの「書き下し文」の方が、圧倒的に読みやすいが、Bの「訓読文」を特に重視つつ、平安時代から受け継がれてきた考え方は、「書き下し文」の訓点と送り仮名が絶対間違いがないということはなく、いつでも「白文」に戻しつつ、その中国語が日本語に翻訳された経過を残す必要からである。

例えば、「致知格物」の「格」については二種類の解釈あり、A「いたる」[B]「ただす」では全く異なる意味になる(註8)

1「知を致す(知識を深める)」は、

物(物の真理)に格(いたる)(＝を追究する)」「
2「知を致すは、物を格(ただ)す(＝解釈し直す)」

前者が朱子学の客観的な「性即理」という思想のこと。一方、後者は主観的な王陽明学的な「心即理」という思想のこと。

以上、高校生・大学生にも教科書の「訓読文」をできるだけ多く、音読させることを徹底させている。「白文」の暗記で読ませる「音読指導」もあるが、中国語である「白文」に拘る必要はないと私は考える。では、ここでさらに「素読」についての効果という問題を論じてみたい。

(3) 「素読」についての一考(安達忠夫の素読のススメ)

高校現場の先生方から、質問を受ける。「内容を理解せずに丸暗記させる『素読』は効果があるのですか」と。江戸時代、漢文に費やす時間が確保できている時は、丸暗記させ、その後で「理解」を合致させるのは、大変効果的であると考えられた。しかし、今、時間短縮の効率を求める国語教育や漢文教育において、「理解なき、丸暗記」は非効率であると必然的に思ってしまう。ところが、「素読」を提唱する村山吉廣(早稲田大学名誉教授)の論考を読み、再考を余儀なくされた。

古語の「読書百編、義おのずからあらわる」を例えとして、また、安達忠夫(ドイツ文学者・埼玉大学名誉教授)の著書を引用しつつ、次のように安藤の考えを掲載している(註9)。

「頭で理解した意味などというものは陽炎のようにあやふやで、いざというとき当てにならない。早急に意味も止めようとせず、ことばそのものを、できれば全体を、くりかえし自分の心に刻みつけておけばこそ、やがて深く根をおろし、生きたことばに育っていくのではないだろうか」と説くのである。

西尾実まで援用している彼の主張は、極めて重いと私は痛切に感じるのだが。しかし、私は「素読」を行っていない。では、次に「模擬授業」について検証していこう。

(4) 二つの「模擬授業」の実践過程の骨子

「両頭の蛇」は、5講義目と6講義目の二回模擬授業を行なった。

5講義目…範読・「両頭の蛇」写真提示・漢字「而・矣・安」書下文・音読（リレー読み）・大意理解・口語訳・「発展問題3問」という授業を展開し、発展問題は次の通りである。

①「母は息子のどんな行為を陰徳としたのか？」

②「天報ゆるに福を以てす」とは、何が福か？」

③「本文の古事成語『陰徳あれば必ず陽報あり』について日常生活でどんなことを行なっているか？」

6講義目…書下文の音読後、本文の読解をさせながら「文脈の『迷信』を中心に問いをグループ討論させ、生徒の発表する」では、次を授業展開を行なった。

①身近にある『迷信』とは何か？」

②「本文中の『陰徳』と『福』は何を指すか？」

③「自分ができる『善行』について考え書き出そう」

『講評』5講義目の学生は、①②を指導書から問題を設定し、さらに③の問題は「古事成語」から自分で考え、日常生活に適用させようとした「応用問題」を掲げたのは、大変素晴らしいことである。しかし、「音読」と「書下文」、「口語訳」に時間を費やし、発展問題の①②③の問題を取り扱うことができず、時間切れになってしまったのは、特に残念であった。ただ、③の問題は、「模擬授業」内で時間をどうにか捻出

し、生徒に出させた「善行」が、以下のものである。「募金・ボランティア・ゴミ拾い・道案内などなど」「思いやりを観念的に思考するだけではなく、実践することが重要だと授業者はまとめ整理してくれた。以上、総括すると、私が常に掲げた「言語教育」「音読指導」から読解に繋げて、「発展問題」の「深さ」を探究する展開は、「模擬授業」として充分評価できるものであると考ええる。

では、次に6講義目の授業について、「講評」で検証を行おう。

(5) 発展問題と独自問題の設定から「深さ」を探究する模索

「模擬授業」で、重要なことは、「指導書」を指南書としてそのまま、授業実践しても、そこに自分自身の「オリジナリティー」はなく、「指導書」「指導教諭等」のコピー授業でしかない。そこに自分だけの「新たな発見」「謎」を見出し、「発展的な問題」を加味し、生徒に開示して欲しいというのが、私の目指す「模擬授業」である。

したがって、「指導書」には、口語訳、用語解説、「問い」でしか教授方法を示せない「限界性」が、常に存在する。その「限界性」を自分の総意工夫（オリジナル）によっていかにブレイクスルーするかという一案を求める、6講義目の「模擬授業」の試みであった。

6講義目の授業者は、①身近な迷信」から、始める。この定義付けを「根拠のない言い伝え、誤った信仰」とし、信じたら、愚かだと強調する。例えば、どんな迷信があるかと、生徒に出させると「夜爪を切ったら、親の死に目に会えない」「吃逆（シヤククリ）百回したら、死ぬ」などが出され、「迷信」の前提をみんなで探っていく。

では、本文では、息子がなぜ「迷信」を信じたのか。それは、「嬰兒（本来は「みどりご」、本文では幼児の意）」だから、「迷信」を信じたのだと生徒は答える。次に②「陰徳」「福」、本文では何か考える。

「陰徳」…他の人が両頭の蛇を見ないように殺して、埋めたこと。

「福」…①死を免れたこと (①)③の答えが出された

② 楚の宰相になったこと

③ 人々の信頼を得たこと

このように授業者は板書した。発問の回答では、①と②が一文となつて提示されたが、あえて意図的に①と②に分け板書した点が圧巻。この三点について、「天が報いた点、とそうでない点」に識別するという「展開」である。①は、「迷信」だから、『天の報い』にあらず、簡潔に否定する。

③の「信頼」も天が報いたとは考えられず、『人』が報いた点で▲という評価を下す。②「楚の宰相への就任」こそが、天が報いた幸運という「福」であると授業展開上、結論付け。圧巻、現役教師さえ凌駕した授業「展開」であつたと私は考え評価した。なぜなら、本文の「迷信」「陰徳」「福」というキーワードを生徒に熟慮させ、深い「思考」の基に「迷信」「人為」そして「天の報いたる『福』」を分かりやすく提示し、本文の「主題」に直結させたからである。この模擬授業には、結末の続きが用意されていた。

この講義の最後「出席カード」にこんな意見が学生より出され、大議論となる。その意見を叙述する。

授業者は、「福」が「楚の宰相になったこと」のみを正解にしているが、「人々の信頼を得たこと」は、「天が報いたこと」にあらずという考えは、問題があります。私が思うに孫叔敖は、陰徳がある人だから、人々の信頼を得たのであつて、その結果宰相になったが故に、天の報いではなく、これもまた、本人自身の「実力」(人為)ではないでしょうか。という反対意見。

こんなに「深い論争」が可能な「模擬授業」はないと、賛辞を贈りたい。しかし、この問題について、充分な論議の時間が取れず、私の方向性だけ示し、この「両頭の蛇」は終了したのだが、それは、こんな方向性

である。授業者が「福」を「孫叔敖の延命」と規定せず、それは「迷信」と一掃した授業展開は、「逆転」であり、「指導書」を書き換える「評価」を下したいと考える。人々からの「信頼」も「天の報い」ではないので、賛同したい。

問題は、「宰相」への就任。中国の時代的には人々が「宰相」を選ぶ民主主義ではない。したがつて、人々が信頼をよせる評価と同時に本人の「実力」もあり、さらに国王から選ばれる「幸運」(天からの運)と考えることも十分説得力があり、三者の力と私は、思考したが、さらに適切な「答」を求め、教材研究に励むべきであろう。(天帝などは、天や先帝が推挙する思想・伝統が中国の古代思想にあり、それに準じて、天からの幸運という考えは、ある意味において説得力を持つので、有効な結論としたのだが。)

七、私の実践という「思索」の座標軸の設定

私(大学講師)がこの「両頭の蛇」を授業展開したら、どうなるであろうか。先ず、疑問を抱いたのが、孫叔敖の行なつた「陰徳」が本当に「徳」なのであろうか、という「疑問」だ。人間の立場なら、「迷信」を信じて、不吉な「両頭の蛇」は排除されることが、当然であるが、蛇の立場から考察すると、障害を持つて生まれただけの、可哀想な蛇が、その障害(不吉)故に殺され『蒙求』では埋められるだけ、土に埋められる「悲惨」な話ということになる。

しかし、この「逸話」は、孫叔敖の「徳」を後世に伝える伝承が、最も大きな役割であり、その「趣旨」そのものを否定するのは、文学作品の「物語」を否定することと同じなので、これ以上展開することは止めることにする。

疑問のもう一点は、強烈な「母の存在観」である。『新序』と『蒙求』とで大きく異なるのが、「母去りて」と叙述される『新序』の語りである。『蒙求』では、母の存在は、取り上げていないが、ただ自分は「死

ぬ」という表現に対して、「母を去りて死するを恐るるなり」（とりわけ母との離別の強調）と明確に母の存在を刻印しつつ記す。

これは、孫叔敖の話であると同時に「母」の物語としても充分読むことができる「文学作品」だと私は考える。想像して欲しい。

一般的な母親なら、息子が泣いて帰宅し、食欲がなければ、心配する。理由を聞けば、死を招く「両頭の蛇」を見たからと告白する。そこで、どんな母でも、当然「迷信だから、死なないわ」と安心の論理（慰め）で諭すのに、この「母」は、直ぐ「その蛇は今どこにあるのか？」と息子行動の如何を、という「意表」を突く。

そして「母」は、自分の息子なら、みんなを、恐れる両頭の蛇をどうすべきか（どうしたであろうか）を悟っている如くである。母は、自分の夫の「生き方」（父・尹・賈）を「莊王の覇者を実現できず無念に死した司馬」という人物。言い伝えありから、息子をどう育てるべきかを常に考え、息子中心に生きてきたかのような、賢母（孟母の如く）の「人生」を彷彿させるのだ。

母は、迷信たる根拠のないものの虚言（癒し）を否定し、迷信という「言い伝え」と同様の、「言い伝えたる格言」「陰徳陽報」『淮南子』からの転載）で、即座に応える。それは、迷信という希薄な「言い伝え」に対して、同じものでもさらに説得力ある強烈な「言い伝え」格言で対応し、決して癒しという気休めの「心情で解決しなかった賢明さが、ここにある。このような母の賢さが「母を去りて死するを恐るるなり」（傍線部）という表現になったと私は考えるが、どうだろうか。深読みだろうか。意見を乞いたい。

また、長沼高校の実践では、この「作品で一番偉い人物は誰か、尋ねたことがある。孫叔敖と同時に「母」の存在をあげた生徒もいた。また、陰徳を評価した人々。その孫叔敖を「令尹」まで引き揚げた君主として、「両頭の蛇」こそ、犠牲になったが、「陰徳」を施す発端を作ったと評価する生徒もいて、興味深いと思った。

こんな様々な問題意識から発し、実践の「座標軸」を新たに設定し、重層的な読みの「思索」を行って行きたいと考える。

八、「まとめ」（他の実践ともに交錯も踏まえて）

以上、「両頭の蛇」を考察してきたが、大変面白い教材であり、「古事成語」と同様に歴史的な「逸話」は、生徒に漢文を教える絶好の単元だと考える。資料として二〇〇六年、長沼高校で実践した「ドラゴン桜」挑発」となぜで読む漢文実践「初発カード」で創造的「意欲」を喚起する」を合わせて、提示しつつ、ご覧いただければ幸いです。

最後に、この母については、前節で夫と共に若干触れたが、もう一度確認したい。母は、孫叔敖を育てた母、「孟母」「孟母三遷の教え」の如く、その「賢明さ」として評価が高い。孫叔敖の父（尹・賈）は、自分を引き立てた楚の莊王を覇者にしようと励むが、結局「司馬」の地位で幽閉され、無念の内に殺された。この後をついだ孫叔敖が、「令尹」という最高位まで昇進し、莊王を引き立て「ヒツの戦い」にて勝利した。そして、見事霸王に就任させ、父の夢を成就させたのだった。

その後、死を前にして息子にあえて「寝丘（楚の最も瘦せた土地）のみを受け取るように」と遺言し、激しい政争の外におかれ、子孫は後世まで繁栄したという逸話が残されている。参考まで記載する（完）

〈註1〉田部井文雄『漢文教養の諸相』（大修館二〇〇五年）「入門教材と指導」

〈註2〉安藤信廣、東京女子大学。研究分野は中国哲学、漢詩。

〈註3〉内田樹『寝ながら学べる構造主義』（文春新書二〇〇二年）

〈註4〉加地伸行『漢文の基礎』（講談社学術文庫）。著者は、大阪弁で碎けて説明するが、また、荻生徂徠の解釈を補足している。「也」は「ナリ」、「矣」は「ケル」、「焉」は「ケレ」と言い直すと述

べ、自信なく「かくもあらん」付け足している。興味深い話である。参考まで。

(あらきみちお／北海学園大学非常勤講師)

〔註5〕渡辺雅之「古事成語の背景」『国語教室72』二〇〇一年2月号大修館。同「二年次の古事成語教材の取り扱い方」

『漢文教室194』二〇〇八年5月号大修館の二本がある。

〔註6〕教育研究全国集会(全教)の国語部会で、長年、司会と共同研究者を務め、繰り返し強調されたのが「文学を文学として読む」ことの重要性である。これは、文学の授業過程Ⅱ方法論で一致させるのではなく、「文学を文学として読む」との本質論で授業を論じること。つまり、多様な読み方(方法論)を学び合うことが重要という観点である。平和教材だから、歴史的、戦争否定する論理で読み取る「文学教育」ではなく、道徳的な観点で文学作品を読み解くことを戒める「論議」の積み重ねを行なってきた。

〔註7〕高校漢文の「入門期」で取り扱う場合「矛盾」は一考を要すると疑問を提示するのは、『漢文教育の諸相』(「高等学校漢文入門教材としての寓話・古事成語の方向性」)「矛盾」の問題点と「助長」の有効性)の中の小原広行である。中学の教科書で全文「書き下し文」がなされていて、別の教材「助長」が優れていると主張する。だからこそ、渡辺は、より深い読解の「背景」の考察を提案している。

〔註8〕樋口敦士「楽漢的思考法―漢文を楽しむための思考法の一案」『数研 国語通信 つれづれ』二〇一四年第二五号)

では、「我読書」の例文と「格物致知」の例を上げて、論じている。示唆に富み多くのことを学ぶ素晴らしい論考。私は、白川静『字統』一〇八頁を参考にした。

〔註9〕村山吉廣「漢文訓読盛行の時代―先人たちは何を素読したか」『漢文教室一八九号』二〇〇三年六月号大修館)